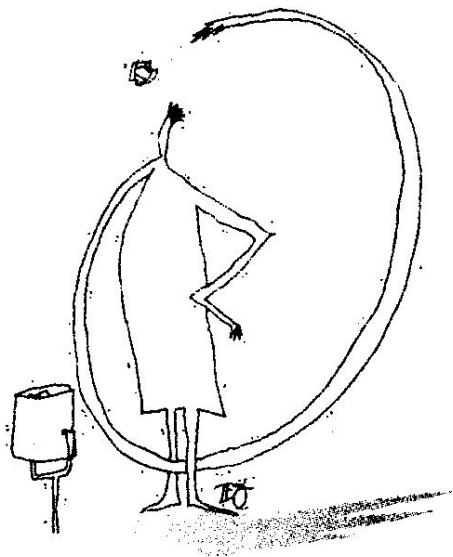


汚れた器

第3編 14章

義認の発端と継続的な発展



キリストの義だけが私たちが神の前で立つことを可能にさせ、神の裁きのまえに立っても許されることを保証するものなのです。私たちは彼の義を与えられたために信仰によって絶えず罪の赦しを受けるのです。この義のために私たちは主の日に朽ちることのない体を受けて、天の栄光にあずかるようにされるのです(コリント第一 15:45 以下)。

汚染者負担の原則という言葉聞いたことがありますか。公害防止費用、つまり環境汚染防止とその対策に必要なすべての費用は汚染原因を作った者が負担しなければならないという、公害法の適用原則です。英語ではふつう PPP (polluter pay s principle) または PP の原則と呼んでいます。その目的は企業の経済条件を同一にさせるところにあります。今日、どの国のどの企業であっても国際社会で商売をしようとするならばこの原則に従わなければならなりません。

とにかく最近、汚染という言葉は現代人に最もよく認識されている単語になっています。あるひとつの器が放射能に汚染されたとを考えてみましょう。それでも、その器からきれいな水を飲むことができるでしょうか。たぶん、その器を使ったらたいへんなことになるはず。人間はすべて汚染された器と同じようなものです。それは信者であっても不信者であっても関係がありません。すでに再生した人も自分の善き行いではなく、日ごとに信仰によってだけ義とされ続けるのです。

第1節 罪に死んだ状態の自然人は救われるまでは決して義とされることはできない。

私たちは次のような四種類の人々に善き行いを見いだすことができます。第一に自然人です。神を全く知らず、偶像崇拜に沈み込んでいる人です。第二に二重生活をするキリスト者です。聖礼典にもあずかり、口先では神を告白しながらも行動では神を否定している名目だけのキリスト

者です。三番目は外面だけを重んじるキリスト者です。彼らは偽善で自分の邪悪な心を隠しています。最後の四番目は真のキリスト者です。神の霊によって再生して、真実な態度で聖化の道を歩む者たちです。以上の四種類の人々はすべてそれなりの善を行い、義を追求しています。それならば、彼らはみな自分の善行によって義とされることができるのでしょうか。彼らの善行は真の善行でしょうか。彼らは本当に自ら善を行うことができるのでしょうか。

それでは今度はこれらの四種類の人の行う善について順番通りにもうすこし詳しく調べてみることにしましょう。まず、自然人の行う善き行いです。彼らは徹底的に汚染されている器と言えます。自然人の善き行いが彼らの義とならない二つの理由があります。第一に、彼らの善き行いは自分のものではないと言うことです。聖書は簡潔に神を知らないすべての人は絶対に善を行うことができないと語っています（エレミヤ 17:9;創世記 8:21;詩編 94:11;ローマ 3:18;詩編 14:2;ガラテヤ 5:19~21）。

ですから自然人に見いだすことができるすべての善き行いは、不信者の才能がそうすることができるように、神が与えてくださった賜物なのです。神はそのように自然人を善き行いを実現させるための道具として用いられ、義を行使され、そのような義で人間社会を維持して下さるのです。またそのような善を行う者に祝福を与えて、恵みを施されますが、それは彼らの行為が神の祝福を受けるにふさわしい功労となっていると言うことではなく、そのように神が善と義を大切に見なされていることを世のすべての人々に示すためなのです。

第二の理由は善行の動機や目標のためです。自然人が悪を行わないのは善行に対する真面目な熱心さと言うよりは単なる野心や利己心、その他の悪い動機のためです。また、人間の正しい行動にはいつも神に仕えるという目的がなければならないのですが、自然人の行動はどんなに正しいものもその目的とは関係ありません。ですからそのような行動はどれ一つとして正しいと言うことができないのです。

アウグスチヌスの言葉のように彼らは道から外れて駆け足をしている人のようなものです。力を尽くして走っているはずなのに目標から遠ざかり、さらに不幸になっているのです。むしろ正しい道をよるけながら歩く方が、道を外れて走るよりはましではないかとアウグスチヌスは問うています。アウグスチヌスの言葉のように自然人はどんなに徳目が高かったとしてもその心が腐敗して、神を知らないために、結局、神の善きわざを台無しにするだけなのです。彼らはキリストの命にあずかっていないために何をしても、滅びと永遠の裁きから免れることはできないのです（ヨハネ第一 5:12）。

キリストとの交わりのない者は悪い木と同じように決して善い実を結ぶことはできません。信仰がなければ、何をしても神を喜ばせることはできないのです（ヘブル 11:6）。で



すから神の恵みのない自然人が善を行うことは小石から油を絞り出すよりもさらに難しいことと言えます。不信者は最初から最後まで神に対して徹底して、露骨な敵となるからです(ローマ 5:10; コロサイ 1:21) ですから自然人はキリストの血によって救い出されるまではどんなに道を極めて、善を行ったとしても決してその善行で自らが義とされることはできないのです(エフェソ 2:4,5,8,9; テモテ第二 1:9; テトス 3:4,5,7; ローマ 11:6)

第2節 二重生活をしたり、偽善を装うキリスト者は裁きを受ける。

こんどは二番目と三番目の器について説明します。やはり、汚染された器です。内と外が全く違って、外側だけはきれいな色で装われている器です。彼らも自分の善行で義とされることはできません。なぜならば、まだ彼らは神の霊によって再生されていないためです。その悲劇的な事実は彼らの不敬虔な良心が証明しています。再生されていないということは、信仰がないということで、信仰がないということはまだ神と和解しておらず、神の前で義と認められてはいないのです。

彼らが自然人よりもさらに悲惨なのは自分たちの悪を指摘されたときに、自分には全く義が存在していないことを認めることができないという致命的な失敗を犯すようになるからです。自分にはわずかながらでも義があると錯覚しているからです。しかし、彼らの良心は深刻に汚染されているために、そこから出るすべての行為は汚染されたものです、汚れたものなのです。汚れた器に入れられて汚れてしまった水と同じようなものです(ハガイ 2:11~14)

そのようなものには自分の義を主張することは全くできません。私たちが律法を守る第一歩は何よりもまず神を真実に礼拝することですが、腐敗した良心にはどういふそのようなことはできません。真実な礼拝が抜け落ちた儀式や善き行いは神にとっては返って無益で、嫌悪すべき汚物と見なされるのです(詩編 1:13~17; 箴言 15:8; 創世記 4:4~7) ですからイエスの血潮を頼り、神の恵みだけを請い求める真の信仰だけが真の善を行い、義とされる第一歩となるのです(使徒 15:9)

第3節 再生した信者たちもただ信仰によってだけ義とされる。

最後は四番目の器です。それは再生した人たちです。子羊の血を注がれた器です。しかし、この再生した人たちも二つの理由から自分の善行では義とされることはできません。第一に信者も自分の力では善を行うことができないからです。なぜなら信者たちも汚染された器だからです。神の恵みによって善を行うのですが、その賜物を入れる器が汚染されているために信者の善行からも悪臭が漂い出るのである。

聖書で聖者とよばれている偉大な人を選び出して調べてみてください。彼の生涯の隅々からも激しくわき出る肉の腐敗した悪臭を嗅ぎとることができませんか。律法に一点でもおちどがあればその人は罪人と見なされるのです(ヤコブ 2:10) 律法はすべての人間を裁き続けます。律法の鏡に映して見るとき傷や過ちがない善行は存在しないのです。既に義とされた私たちの善き行いもそうなのです。どんなに再生した信者だとしても自分の力ではまったく義人になることはできません。神の目からは天空に輝く星までも清くはないと歌われているではありませんか(ヨブ 25:5)

しかし、神の慈しみはその罪を許し続けます。神は信者をキリストにあって愛によってだけご

覧になられます。汚染された器ですが、キリストの義で覆ってくださるのです。ですから信者の義は神のその愛を信じる信仰にのみ根拠を持っています。

そして神に召されて聖なる生活を送ったアブラハムも善行ではなく、その信仰によって義とされたと言われています（ローマ 4:3）。預言者ハバクもすでに義とされた信者に「義人は信仰によって生きる」と叫び続けました（ハバク 2:4）。これは最初から終わりまで人間の行為には希望がないという意味を教えているのです。ですから信者もただキリストの恵みの内だけで聖化されつづけ、保持さえ、すべての不義を覆われて、完全な服従を実現するようにされるのです（ヘブライ 4:14～16、エフェソ 2:8,9）。

第4節 スコラ神学者たちの抗議と聖人の余剰功勞説についての検討と反駁

スコラ神学者たちは言葉のいたづらを巧妙に語っている。それは私たちの善行には義とされるに十分な価値はないが、「受け入れられる恵み」という点で、大きな価値があると主張するのです。そして私たちの義が十分ではないために罪のゆるしが必要であるが、しかし、私たちの洗礼後に行った罪については（聖人の）余った功績によって十分に償われると語ります。しかし、彼らが「受け入れられた恵み」と呼ぶものは神が無償で与えてくださる善にすぎないのです。父はキリストの内でも私たちを受け入れられて、キリストの義を私たちに着させてくださるのです。神はそのために私たちを義としてくださり、聖としてくださるのです。

キリストの義だけが私たちを神の前で立つことを可能にさせ、神の裁きのまえに立っても許されることを保証するものなのです。私たちは彼の義を与えられたために信仰によって絶えず罪の赦しを受けるのです。この義のために私たちは主の日に朽ちることのない体を受けて、天の栄光にあずかるようにされるのです（コリント第一 15:45 以下）。

このように余剰功勞説を主張する者たちが誤解していることが二つあります。一つは神の要求がどんなに厳格であるかをよく知らないということ、もう一つは罪がどんなに重大かをよく知らないと言うことです。私たちは世の人々のすべての義を合わせても一つの罪も償えないと言う事実を知るべきなのです。また、私たち自身を含めて、私たちのすべての善はみな神のものであり、そこには余った功績というものも存在しないのです（ルカ 17:7～9）。私たちが行う義は神の審判の前で通じるものと言えるのでしょうか、それは裏通や町の広場を通るのは全く違うことを忘れてはいけません。私たちの善行は例えて語ればはえが入ったジュースのようなものだからです（詩編 143:2）。

哲学者たちは事物を形相させる四つの原因があると語りますが、私たちの救いを実現させるものも次のような四つの原因があります。第一に動力因は神が無償で与えてくださる愛です。第二の質料因はキリストです。第三の形相因は信仰です。そして第四の目的因は神の忍耐を賛美することです（ヨハネ 3:16；ローマ 3:23、24；エフェソ 1:6）。私たちを救ってくださる根拠はすべて私たちの外側にだけ存在するのです。私たちの善行はどこにも入り込む余地はありません。

しかし、私たちの善行もいくつかの固有な益を持っています。まず聖徒たちは自分の善行によってこそ神が自分を愛され、自分の内に住まれ、自分を通して善を行われているという確信を持つことができるようにされます。そしてさらに大きな力と慰めを受けるようになるのです。そのような行為を神の賜物と見るとき、それらはちょうど神の御顔から輝きでる光のように、私たちの心を照らし、善の最高の光明を私たちが仰ぎ見ることができるようになります（ローマ 8:15）。

参照)。そして私たちは善行を神の召命の結果と見なし、喜ぶのです。

ですから、私たちは私たちの善行を私たちの義の根拠としてではなく、神が私たちを愛を持って導き出してくださった結果と考えるのです。ここから聖徒の感謝と力と喜びが生まれるのではないのでしょうか。ところでときどき聖書は神が私たちの善行を見て喜び、そのためにさらに恵みを施されると記しています。しかし、これは神の恵みの原因を語っているのではなく、神が私たちに恵みをあらわしてくださる時間的な順序を表現しているのです。ですから使徒パウロはローマ6章23節で死と命を対比しながら、罪と私たちの善行を対比しないで、罪と神の賜物を対比しているのです。死は人の行為から生まれますが、命はただ神の慈しみからしか生まれないのです。

結びの言葉

一度汚染された器に盛られたものはみな汚いものです。善行に関して一人の自然人でも再生した人でも汚染された器であると言う事実は全く変わりがありません。どんな善行でもみな律法の水準に達することはできないのです。ですから自分の行為を頼りにして、自ら誇る癖はますますに捨てる必要があるでしょう。